

説教 「神と和解した人生を」 イザヤ 42:1-4 ローマ 5:1-11 2023. 6. 4

仙川教会代務者・八街西伝道所代務者・ユーカリが丘教会主任担任教師 大串 眞

今日の説教題は「神と和解した人生を」と少々堅い言葉でまとめました。これをもうちょっとくだけて言うと、それは、「恵みのサンドイッチを生きる」と表せるのではないかと思います。恵みと恵みに挟まれて、まるでサンドイッチのような状態として、わたしたちは恵みの中を生きていることを聖書は告げています。それはわたしたちが意識して気づいているか、気づいていないかということに拘わらず。たとえ、気づいていなくても、意識していなくても、恵みのサンドイッチの中にわたしたちは、置かれているということを語っている。

このサンドイッチで挟んでいるパンは、時間的に前と後ろということで、縦型に並んでいるサンドイッチをイメージとしてください。

まず、手前側のパンです。それは、信じて義とされて、神との間に平和を得ていると、5:1-2で語られていることです。これは、今までロマ書で語られてきました。聖霊に導かれてイエス・キリストを信じる者は、誰であっても、救われるのです。十字架と復活が一つになって救いのみ業として語られていました。わたしたちが、信じることの中で、イエス様の十字架と復活と結びついて、罪が赦され、そして、永遠の命に生きる。それが、「義とされる。」ということです。それは、正しいと認められるということですが、神様との関係において、和解の関係に置かれるということですね。1節で「神との間に平和を得ている」とあります。この平和ということが、和解なのですね。それは、罪が赦されているということだけにとどまらず、神様にこよなく愛されていることを知っているということですね。これはある意味で自信のようなものですね。愛されている自信です。そのことを「わたしたちにあたえられた聖霊によって神の愛がわたしたちの心に注がれている」5節とか、「罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」8節。

「敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていたただいたのであれば」10節と言葉を言い換え、重ねながら重厚に語っているのですね。しつこいぐらいいかかもしれません。言葉を変えながら、だんだんと深まっていくことにお気づきでしょうか。それはいってあげれば、神から最も遠いところにいる最悪の罪びとであってもという強調をしているのです。それはわたしたちのためです。わたしたちは、自信がないのです。神様の愛の中に置かれて、決して変わることはない真実な神の愛の中にいることを、実はなかなか信じることができないからだと思います。これは、クリスチャンになる前の求道者の人に語っている面もあるでしょう。なかなか信じがたい。しかし、それ以上に、すでにクリスチャンとして教会生活を続けている者に対しても、念を押すかのようにぐいぐいと迫って来る勢いがあります。確かに振り返ってみると、堅い信仰とは言えない。ぐらついていると思ってる方が多いのではないのでしょうか。いや、これはわたし自身のことでもあります。自分自身のことを見る。クリスチャンになっているはずなのに、神様を喜ばせる歩みをしていると必ずしも言えないところが正直あるのです。自分を見れば、罪深くもある。信仰が弱いと言ってしまうとしょうがない、そんなわたしたちだからこそ、何度何度も、言葉を重ねながら言うのです。「大丈夫だ」「大丈夫だよ」「あなたも神の真実の愛の中に置かれているよ。」十字架のキリストを指し示しながら、ここに神の真実があわれているじゃないかと訴えてくる。使徒パウロは自分の経験も重ねて言っているのかもしれませんが。わたしのようなものでも、神に敵対していた最も神と遠いと思える者も、この愛の中においてくださったのだから、あなたが救われないはずがない。愛が届いていないはずはない。そうや

って、まず、出発点として最初のパンの恵みがあるのですね。そして、このことは、最後のパンにもつながってくるのです。神の真実の愛に中にいる者だから、終わりの時、最後の審判を乗り越えて、確実に、神の国の和解と永遠の命の祝福の中にある。それが確かな希望としてある。死を越えた恵みなのですね。この最後のパンと、最初のパン、すなわち信仰による義を得て救いに入ったことを見渡して、恵みのサンドイッチ状態になっていると語っている箇所があります。

では、その恵みのパンにはさまれたサンドイッチの中味ですね。それが、3-5節の苦難の中でこんな現実を歩んでいるという言葉であります。

ここはあまりに有名な箇所であります。3-5節をもう一度読んでみましょう。

「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」  
一つ一つの言葉にとらわれず味わってみましょう。2つのことが言われていると思います。

ひとつは、現実の苦難があるがまま受けいれているということです。

これはやせ我慢とか、きれいごとの言葉なのでしょうか。そうではないとわたしは思います。パウロは、生身の人間として、苦しみ感じなかったのか。そうではないであります、コリント第2の手紙の中で、主の僕としてありとあらゆる苦難を受けて、眠ることのできない日々だった。死の恐怖だったと率直に語っています。しかし、そういうあるがままの現実をうけいれながら、その中で、自分の内にあるものではなくて、内側からささえるもの。そういう平安。心のゆとり。ポジティブな自分。そういう生き方や考え方が、与えられている。どんな困難があっても打ち負かされない、そういう奇跡とも言えることが、やはり与えられているんだ。そう語っているのです。

それは一言で言って「平和」です。それは、心のゆとりとも言えることです。苦難はある。でも苦難を苦難とも思わず、むしろ、苦難は、成長していくチャンスだ。この苦難を通して、わたしたちに与えられている確信を強めることになる。わたしたちの信仰も、希望も愛も深められていくことになる。そうです。恵みが深まっていくのです。より御言葉に沈潜することが起こるのです。ねばり強く、そして、柔軟に、さらにたくましく歩みを導かれていくのです。それが、クリスチャンライフなのです。じゃそれがどうしてそうなのかと言われても、こう答えるしかありません。「わたしたちにはわからないのです。ただ、神との平和が与えられているからだと思います。神と和解している人生だと聖書が言っていますから、わたしはそう言うしかありません。」たとえ、自分が自覚していなくても、無意識だったとしても、わたしたちは、いつのまにか恵みのサンドイッチを食べているのです。ですから、重さや、疲れや、いろいろと心は捕らわれてしまうのですが、祈っていると、礼拝に出ていると、神の平和が勝利していくのです。そういうことになっているのです。

第2のこと。それは、わたし自身の中にあるものが先ほどのように柔らかく、ねばり強い心になるということではなく、わたしたちは空っぽで、外から来ることによってなるということです。「わたしたちに与えられている聖霊によって神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」

みなさん、聖霊によってとか、神の愛が注がれているとあります。でもまた考えてしまうのではないのでしょうか。教派によっては、この「感じる」という点を強調して、聖霊に満たしを

「感じ」、「神の愛を感じる」ためには、悔い改めを強調し、また祈りが足りないと指導され、神の愛がこんなにも感じられている自分を証しするグループがあります。それがすべて間違いとはいきませんが、私はここで言われていることは、感覚的にとらえるということではなくて、信じるのが大切なんではないかと思います。信じて、洗礼・バプテスマを受けて、教会に入る者には、約束として聖霊が与えられることになっています。そして、約束として、神の愛は注がれていることは、確実なのです。これは客観的な真理なのです。

このロマ書を読んでいると、神様が、イエス・キリストを通して、与えてくださった救い。そして、聖霊によって届けてくださった信仰と愛は、わたしたちが信じたり、感じたりする以前に確実にそうなっている恵みの事実として語られているようです。つまり、こういうことなのです。みなさん、このしるしは、わたしたちが聖霊に導かれて教会でバプテスマを受けているということです。私は良く教会の皆さんに言います。「まがりなりにも教会生活を続けているという事実はありますか」。それはもうしるしが与えられているのです。感じてなくても、自覚していなくても、この約束の中にいるのです。聖霊は注がれているのです。そして、神の愛の中、私たちは歩んでいるのです。あなたはサンドイッチに挟まれているスクランブルエッグのようなものです。おいしい具そのものなのです。恵みのパンに挟まれたサンドイッチ状態。そういう恵みの中に生きているのです。

ですから、自信をもってください。あなたは現実をあるがまま受け入れることができるのです。そして、どんな試練の中でも、決して疲れ果てることも無ければ、ストレスで押しつぶされることもない。ピンチをチャンスに変える知恵と心のゆとりとたくましさを持っている。生涯の最後まで生きる。それは大事業と同じです。試練は人生を学ぶ大切な学校となります。自分では何もできない中で、謙遜も学んでいきます。どんな現実の中でも、恵みを数える機会にすることができます。どんな時も、証しの時とさせていただきます。望みについても触れられています。神の愛に裏付けされた望みは決して裏切らないのです。失望に終わることはない。絶望ささせるのは、サタンのやり口です。サタンに負けてはならないのです。勝利の信仰を。

「望みはあるよ」伝わったかどうか、わかりませんが、聖牧師との最後のメールで、私が残した言葉です。「望みはある」

みなさん、わたしたちがたとえ、気づいていなくても、十分に自覚していなくても、自分自身を見つめたら、つかめないのですが、聖書の言葉を信頼して、聖霊は、わたしたちの内に宿っておられると信じるならば、そして聖霊と共に復活して天あげられたキリストが、不思議なことですが、聖霊がわたしたちの内に宿っていることと同時に、わたしたちのうちに宿ってくださっていると聖書は語っています。この方を信仰において見つめる時に、そのように受け入れる時に、わたしたちは平和になります。現実を乗り越えていくことへ導かれます。

イザヤ 42:1-4 を合わせて読みました。「傷ついた葦を折ることなく、暗くなってゆく灯心を消すことなく・・・確かにする。暗くなることもなく、傷つき果てることもない」

前の口語訳では、「傷ついた葦を折ることなく、ほのぐらい灯心を消すことなく、真実をもって道をしめす。彼は落胆せずついに道を確立する。」とあります。

この方が、わたしたちに寄り添ってくださっているのです。この方が教会に宿っておられます。また、わたしたち、わたしの内に宿っておられます。それが、教会の底力、わたしたち一人一人の底力です。だから、わたしたちは大丈夫なのです。この恵みの中を歩んで参りましょう。祈ります。